

ごあいさつ

変幻自在な「こころ」の姿



吉川左紀子

Sakiko Yoshikawa

何かを新しく始めようとするとき、その気持ちを表現して、よく「期待と不安が入り混じる」という。2007年4月、こころの未来研究センターでの活動が始まったときの私たちの気持ちを測ったとしたら、おそらく期待3、不安7くらいだったのではないだろうか。心理学、脳科学、宗教学を専門とする研究者が集う小さな研究組織ができ、そこで、人、動物、さらには森羅万象の「こころ」を明らかにする試みに挑戦する。そしてそこから、未来に向かうこころの在り方を考え、社会に向けてその成果を発信する。日本中の大学を探しても、このような研究組織はおそらくないだろう。

「こころって一体なんですか?」「こころをどうやって研究するんですか?」「こころを調べて、それで何をめざすんですか?」私たちが一番多く尋ねられた質問である。一人ひとり研究者によって答えが異なる。私自身も、尋ねられるたびに少しずつ違う答えが思い浮かぶ。こんなことでだいじょうぶだろうか、と考え込むことも多かった。

しかし、3年の月日がたち、改めてまわりを見渡すと、今、センターには多くの連携研究員の方々とともに進めている30近い連携プロジェクトがあり、それぞれの研究から直接間接に見えてくる変幻自在な「こころ」の姿に、改めて目を開かれる思いである。

「こころ」を探求する学際的な研究組織で何よりも大切なのは、まわりの人たちとの対話を重ねながら、もっとも基本的な問いかけである「こころとは何か」「こころの探求によって、見えてくる未来はどのようなものか」を考え続け、時間をかけてその答えを探し続ける粘り強さである。そうした営みが、こころの未来研究センターという場に豊かな土壌を作り、そこで育つ研究成果という樹木は、強くたくましいものになるのだと思う。

「三つ子の魂、百まで」ということばがある。生まれてから3年たったセンターの中に、これからさらに成長する「何か」が育ちつつあることを感じている。